

男性は女性よりも、「安易な気持ちで結婚する人が、離婚するのだろう」、「性格的に問題のある人が、離婚するのだろう」、「離婚する人は、子どもへの愛情が少ない人である」、「子どもがいるのに離婚するのは、親の身勝手である」と考えている傾向が強かった。男性は女性よりも、離婚の原因は、本人の性格的な問題や軽率な結婚理由、親としての無自覚さにあると認識していた。

### (3) 離婚家庭の子どもに対する考え(Q7)

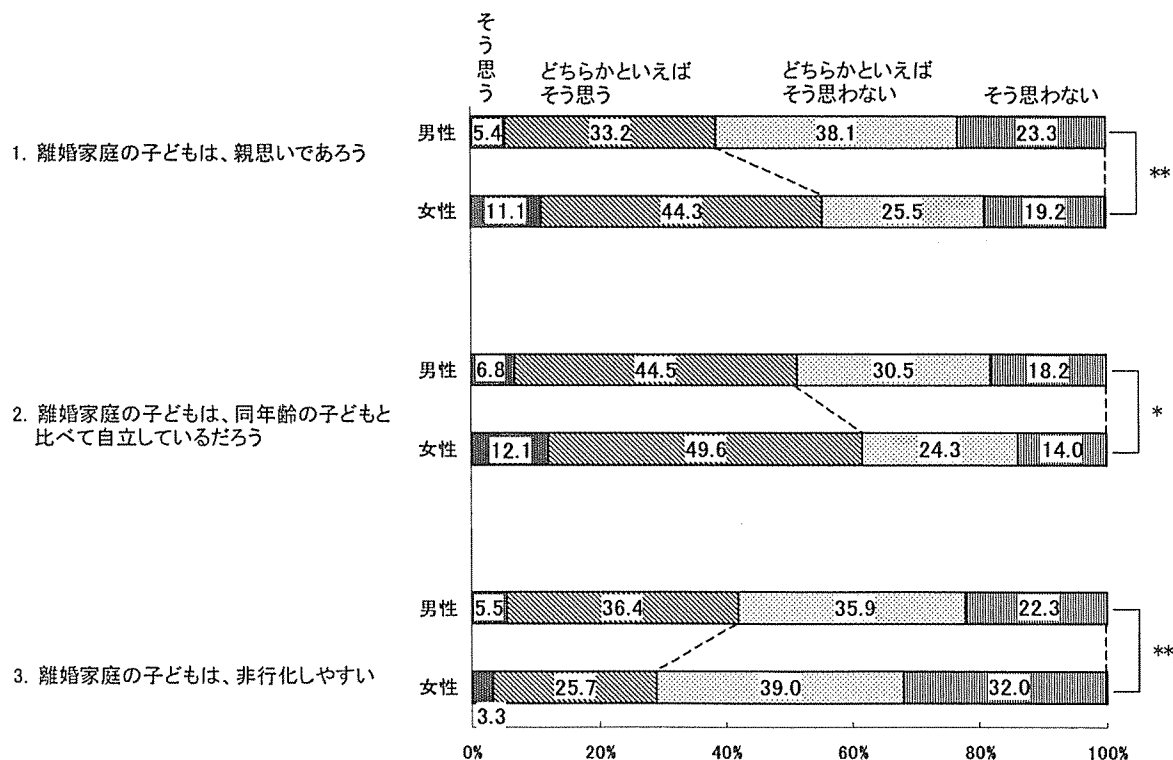
#### ① 離婚家庭の子どもに対する考えの全体的傾向

離婚家庭の子どもは、「非行化しやすい」、「学校で問題を起こしやすい」という考えには、7割前後の回答者が反対していた。また「離婚家庭は、不良仲間のたまり場になりやすい」という意見には、7割強の人が否定していた。一方、9割弱の回答者が、「子どもには両親がそろっていることが必要である」と考え、8割の回答者が、「離婚すると、子どもにストレスがかかる」と回答していた。全体として、離婚が子どもの反社会的行動を確実に促すとはとらえられていなかった。しかし、子どもには両親が必要であると考えられており、片方の親が欠けることによって子どもにかかる負担が懸念されていた。

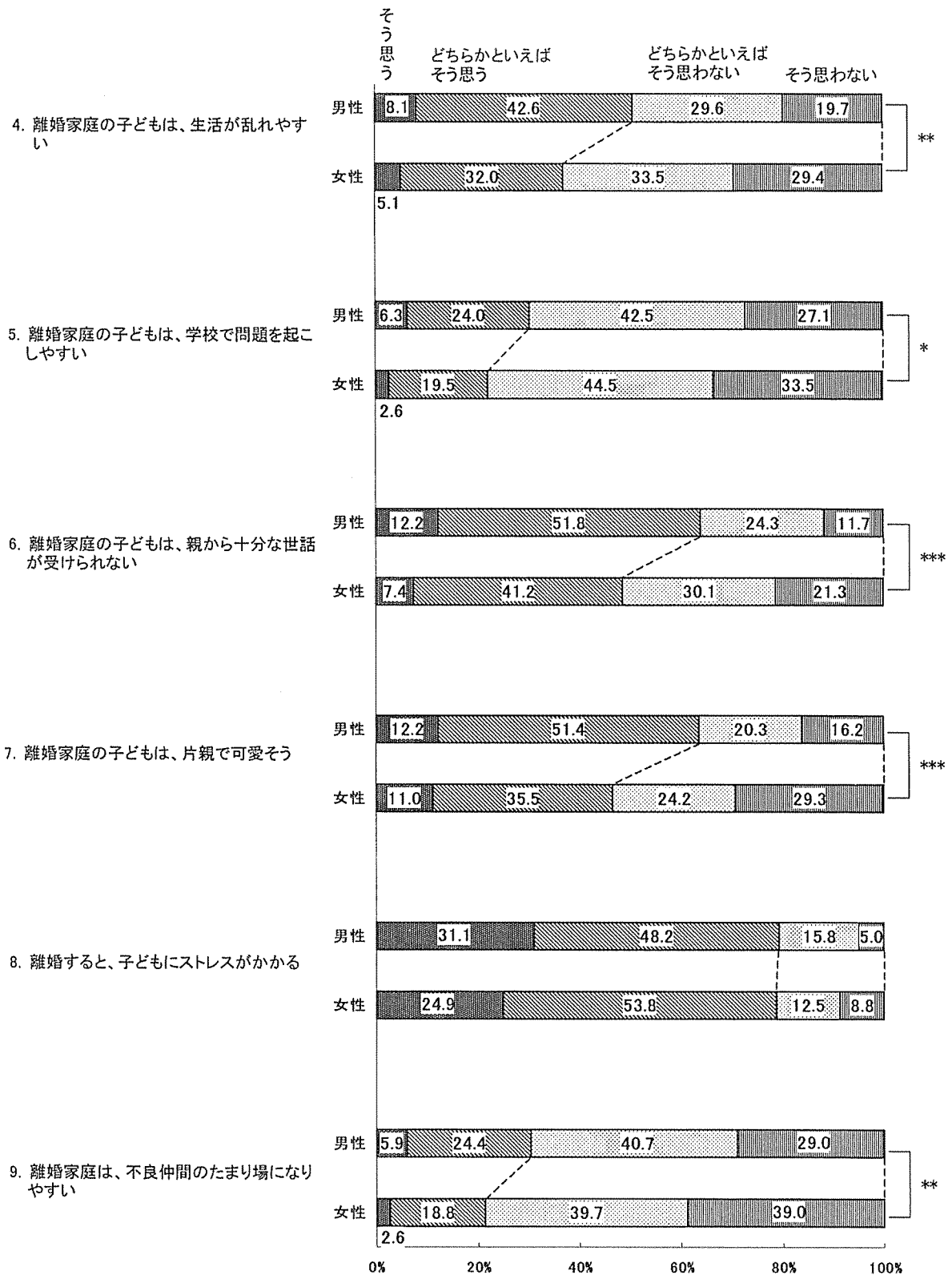
#### ② 離婚家庭の子どもに対する考えにおける性差

男女別にみた離婚家庭の子どもに対する考えの回答結果を、図表 2.19 に示す。

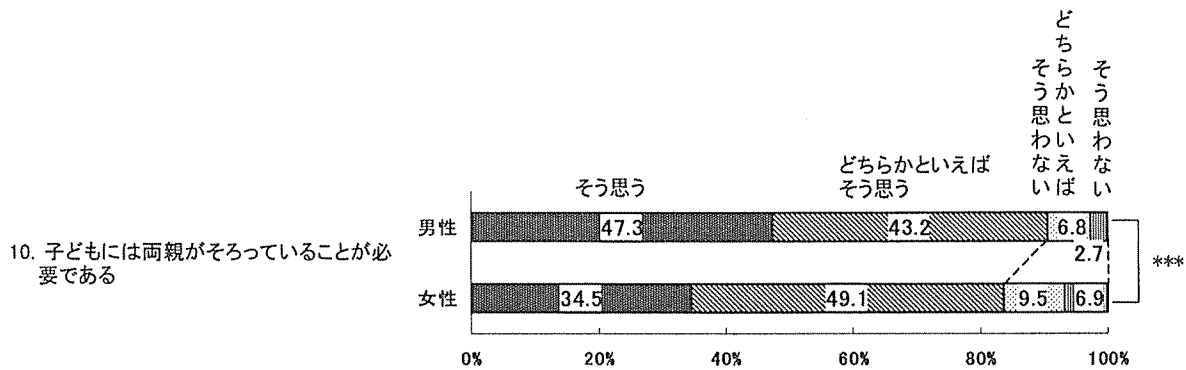
図表 2.19a 男女別にみた離婚家庭の子どもに対する考え(Q7)



図表 2.19b 男女別にみた離婚家庭の子どもに対する考え(Q7)(続き)



図表 2.19c 男女別にみた離婚家庭の子どもに対する考え(Q7)(続き)



男性は女性よりも、離婚家庭の子どもは、「非行化しやすい」、「生活が乱れやすい」、「学校で問題を起こしやすい」、「親から十分な世話が受けられない」、「片親で可愛そう」、「不良仲間のたまり場になりやすい」と考えており、また「子どもには両親がそろっていることが必要である」と感じていた。一方、女性は男性よりも、離婚家庭の子どもは「親思いであろう」、「同年齢の子どもに比べて自立しているだろう」と認識していた。

男性は、離婚家庭の子どもに対して好ましくない印象や、離婚による子どもへの悪影響を強く認識しており、離婚家庭の子どもは、問題行動を起こしたり、非行化したりしやすいと考えている。一方、女性は男性に比べて、子どもの精神的な成熟という離婚によってもたらされるプラスの側面を強く認識している。

## 2. 離婚に対する意識の構造

### (1) 因子分析による離婚に対する意識の構造の検討

離婚に対する意識の構造を検討するため、離婚・離婚する原因・離婚家庭の子どもに対する考えのすべてをあわせた全項目に対して因子分析（主成分分解、バリマックス回転）を行った。それぞれの質問項目に対する回答は、「そう思う」を4点、「どちらかといえばそう思う」を3点、「どちらかといえばそう思わない」を2点、「そう思わない」を1点と得点化された。

固有値1以上の因子について、因子数を変化させながらバリマックス回転を行った結果、解釈可能性から、6因子が抽出された。各因子の寄与率（回転後）は、第1因子から順に、11.9%、10.4%、9.6%、5.8%、5.3%、5.1%であり、累積寄与率は48.0%であった。因子分析の結果を、図表2.20に示す。

第1因子は、「離婚家庭の子どもは、生活が乱れやすい」、「離婚家庭の子どもは、学校で問題を起こしやすい」などの項目の負荷量が高いことから、『離婚家庭の子どもへの否定的イメージ』を表す因子であると解釈された。第2因子は、「安易な気持ちで結婚する人が、離婚するのだろう」、「離婚する人は、子どもへの愛情が少ない人である」などの項目の負荷量が高いことから、『離婚する親への否定的イメージ』を表す因子と解釈された。第3因子には、「離婚は、恥ずかしいことである」、「離婚した人は、人生の敗北者である」などの項目の負荷量が高いことから、『離婚に対する否定的評価』を表す因子と解釈された。第4